氏　　名	安西　克巳
学 位 の 種 類	博 士（経営学）
学 位 記 番 号	甲 第 4 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	金融機関による中小企業評価方法の課題と新たな方法の提言　～中小企業と金融機関との円滑なコミュニケーションの実現に向けて～
論 文 審 査 委 員	主査　髙橋　元　教授 副査　春日 正男 客員教授 篠原 一壽 教授 中島 洋行 教授 矢作 恒雄 教授

論文の内容の要旨

今般、安西克巳氏から学位請求された論文の題名は、『金融機関による中小企業評価方法の課題と新たな方法の提言～中小企業と金融機関との円滑なコミュニケーションの実現に向けて～』である。論文執筆の目的は、副題に示されるように、中小企業と金融機関との間のコミュニケーション円滑化を図る上で効果的な企業評価方法を提言することであり、それにより情報の非対称性を緩和せしめ、中小企業金融の充実に資することを目指している。

論文は、第 1 章「序論」、第 2 章「中小企業の役割と現状」、第 3 章「中小企業金融の課題と取り組み」、第 4 章「従来の中小企業の評価方法と課題」、第 5 章「新たな財務評価方法の提言」、第 6 章「新たな定性評価方法の提言」、第 7 章「中小企業と金融機関の円滑なコミュニケーションの実現に向けて」、第 8 章「結論」の 8 章から構成される。

先ず、第 1 章では、研究の背景・目的、論文の概要が述べられている。第 2 章から第 4 章までは、中小企業金融の全体像を概観するために設けられている。これらのうち第 2 章では、中小企業の定義、役割、現状、特徴について、中小企業庁などの資料に基づく図表類を用いて示し、中小企業が地域経済の中核的役割を担いながらも、企業数が減少傾向にあること、経営者の高齢化が進捗していること、情報開示体制が未整備であること、所有と経営の一体性が認められること、小規模で経営基盤が脆弱であるため外部環境の変化に影響されやすいこと、などが指摘されている。第 3 章では、金融機関（資金提供者）の立場から、中小企業

金融の特徴、現状、課題などが整理されている。メインバンク・システムの意義、リレーションシップ・バンキングやトランザクション・バンキングの機能、さらには信用保証制度の役割（信用保証協会の取り組み）などが示され、ホールドアップ問題、ソフト・バジェット問題、金融機関と中小企業間で相互の要求や認識にギャップが存在する問題などが議論されている。第 4 章では、金融機関による中小企業評価について、従来の財務評価方法を紹介し、定性評価（経営者の特性など）の重要性とコントラクティング問題などの課題を述べ、中小企業の経営支援を効果的に行うための企業評価方法の開発・活用の必要性を主張している。

第 5 章から第 7 章にかけては本論文の中核的部分であり、それまでの記述を踏まえて新たな評価方法を提言している。第 5 章では、先ず従来の財務評価方法について、リレーションシップ・バンキングの深化に向けた課題を示した上で、Altman Model に基づくスコアリングモデルとその問題点を掲げ、実際のデータを用いて倒産リスクの評価を試みている。ここでは「簡易実質自己資本」という概念を導出し、これに「営業 CF」を組み合わせることで経営状況の可視化を図っている。これらは従来のモデルに比べて実用性と応用性に優れており、中小企業の倒産リスクを定量評価し得るため、貸出プロセスの円滑化やリレーションシップ・バンキングの深化が図られるとしている。第 6 章では、従来、評価の多面性、簡便性、客観性などが実用上の課題とされてきた定性評価について、技術力を例にテキストマイニングの手法を用いて評価項目の分類を試みる。抽出された項目を対応分析しクラスタリングした上で、現実の製造業の企業データにより財務状況と技術力に関わる経営資源の相関分析を行っている。その結果、これら一連のアプローチは中小製造業の実態を把握し評価する上で有用であり、実務利用に一定の道筋を示していると主張している。第 7 章では、前 2 章の提言を受けて、中小企業と金融機関との一層のコミュニケーション円滑化に向けた財務評価や定性評価の効果的手順を具体的に提示し、中小企業支援に関わる各主体の今後の取り組み（相互の連携など）に対する期待が述べられている。

第 8 章では、本論文の概要を纏めた上で、今後の課題について記されている。具体的には、本論文ではスクリーニングに着目し、中小企業と金融機関とのコミュニケーション向上を促す議論を重ねているが、近年では経営支援や再生支援の視点からモニタリングの重要性が高まっており、これらを含めた中小企業金融全体に及ぶ考察を目指したいとしている。

審査の結果の要旨

＜審査経過＞

予備審査を経て、安西克巳氏は本学に博士の学位申請を行い、所定の規程に従って学位請求論文が提出された。これを受けて、経営学研究科では審査委員会が構成され、各委員が慎重且つ厳しい査読を行った。

安西氏は栃木県信用保証協会に勤務しており、中小企業金融の実務に携わっていることから、融資現場における数多の問題意識を抱いており、それが今回の研究成果として纏められたものと判断される。

提出論文は付属資料等を含めると 155 頁の大著であり、内容面でも意欲的にテーマに取り組んでいるものと評価される。特に、金融機関が中小企業の評価に際して伝統的に行ってきた財務面の評価と定性評価についての方法上の問題点を明らかにし、それらに対する独自の解決策としての評価方法を提言している点には高いオリジナリティーと実務利用性を認めることが出来る。定性評価に関して、製造業の技術力に着目していることも妥当なアプローチと言える。

その半面、学術論文としては幾つかの問題点も内包している。先ず形式面では、①参照ページや WEB 上からの引用には閲覧日を明記する必要があること、②英語の略称は初出時にフルスペルを括弧書きすべきこと、③不用意に断定的な表現をしている箇所や用語使用の誤謬が散見されること、などを指摘し得る。

内容面では、①技術力を重視しているが、それ以外の要素が扱われておらず、非製造業に対する評価の考察が不足していること、②統計的アプローチに解釈上の問題や稚拙な表現が認められること、③本論文の主張について研究上の限界点が明示されていないこと、などが指摘される。

口頭試問の場では、こうした諸点について、審査委員から厳しい質疑が展開された。ただ、これらの問題点については、表現上の工夫等によりかなりの程度改善されることが予想され、修正可能であると判断された。

＜審査結果＞

本論文は、上記のように依然多くの問題点を抱えてはいるものの、研究に取り組む安西氏の真摯な姿勢は高く評価され、主張される提言も実務面で多くの示唆を与えるものと認められる。経営学が実学として社会に貢献する側面を考慮すれば、安西氏の論文からは相応の新たな知見が看取される。

以上の状況から、当審査委員会は口頭試問で指摘された内容の修正を条件に、安西克巳氏に博士（経営学）の学位を授与することが妥当であると判断するに至った。

（文責：髙　橋　　元）